View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

書評『マイクロファイナンス事典』

Introduction to *"The Handbook of Microfinance"*

八木　正典
YAGI Masanori

1. はじめに

筆者が本書を手にして、最も共感したのは、金融包摂（ファイナンシャル・インクルージョン：以下 FI と略）分野の第一人者で、本書の第 5 部−2 執筆者である S. ラザフォード・バングラデシュ SafeSave プログラム議長[(1)] による「金融は時間を通じてお金を動かすトリックである」との言葉である。

思い起こせば、1970 年代にグラミン銀行創始者であるモハンマド・ユヌスらが貧困女性を対象に、グループ連帯責任、集会方式という社会的関係性を担保に金銭的・物的担保を取らない当時としては画期的な融資・返済方式を採用してマイクロクレジット（以下 MC と略）を提供し成功して以来、その方式は世界の各地に瞬く間に広まっていった。そこでは、女性達は、小規模ながら起業に必要なまとまった資金を手に入れて、週 1 回の分割返済を続けるという時間の操作を通じてお金の動かし方を学んだ。その後 MC から多様化し発展したマイクロファイナンス（以下 MF と略）の革新性と潜在的発展性、ならびに時間を操るトリックに魅せられた世界の研究者、実務家、開発機関関係者らは、ユヌスの取り組み開始以降 40 年以上にわたって、MF を取り巻くさまざまな課題に立ち向かうことになる。本書は、この分野で最前線に立つ研究者・実務家の取り組みとオリジナル刊行時点で認識されていた課題に関する研究成果の集大成である。

2. 本出版に貢献した人々

本書は、MF 欧州研究センター（CERMi）が 2011 年に刊行した「*The Handbook of Microfinance*」の日本語翻訳版で、明石書店から 2016 年 1 月発行された。全体で 700 頁以上におよぶ大作である。監訳者は、立教大学を経て、現在跡見学園女子大学教授である笠原清志教授[(2)]、訳者は翻訳家の立木勝氏である。本書のオリジナル[(3)] は、MF 分野の研究の最先端を走る 48 名の学者・実務家の論文をとりまとめたもの。

3. 本書の狙い

オリジナル共同編者は、MF は今どの地点にいるのか、10 年後の未来はどうなって

いるのかを真剣に考えるときに来ているとしている。そして、「限られたMFの商品と銀行のサービスを利用できない20億人以上の世界の貧困層の金融サービスに対する需要との間には、なぜこれほど大きな乖離が生じているのか」という問いに対して、研究者と実務家の双方から見識ある回答を求めることが、本書の最大の目的であるとした上で、MFについては、少なくとも次の5つの流れを明確に認識できるとしている。

(1) 貸付方法の変化：連帯責任グループ貸付方式から個人貸付への移行。
(2) 金融商品の供給の変化：MCのみならず、貯蓄、保険、送金等他のサービスの提供。
(3) 供給者のプールの拡大・多様化：NGOが商業化し規制をうけるMF銀行に転換したり、社会的責任投資家の投資により、MF機関への資金供給増加傾向が認められる。
(4) 監督・規制の劇的な変化：従来規制がないか緩やかだったMF機関の多くが商業化や顧客保護の流れの中で規制対象になり、当局の監督下に置かれることとなった。
(5) 金融における優先順位の根本的な変化：MF機関が生み出す利益の顧客との分配、MFの対象を都市部から農村へ、女性だけでなく男性に、起業だけではなく消費を含め、また、農業部門の活性化を目指す方向性に理解が深まっている。他方で、最貧困層を犠牲にせずに如何にかかる変化をなし遂げるのかが問われている。

4. 本書の活用法

本書は、第1部「MF実践の理解」、第2部「MFのマクロ環境と組織背景の理解」、第3部「商業化に向けた現在の流れ」、第4部「満たされない需要を満たす—農業融資の課題」、第5部「同—預金、保険、超貧困層への標準」、第6部「同—ジェンダーと教育」で構成されている。長編である本訳本をすべて一気に読みこなすことは簡単ではなく、また効率的でもない。例えば、「MFは最貧困層を排除しているのではないか」との疑問を持った人がいるとすれば、その人には、第5部の中の「超貧困層への標準」論文にアクセスし、それを入り口にして、そこから広がる未知の世界への探査を続けていく事をお勧めしたい。このような包括的文献が日本語で初めて提供されたことは、国内でのMFに関する研究を触発するうえで、極めて重要な一歩である。

5. 本書発行以降の動きのフォローについて

3.で指摘された課題のほか、最近ではITの活用、貧困削減の効果の測定と実証等への関心も高まっている。CGAP（貧困削減諮問協議グループ）のフォーカス・ノートは最新の研究動向を紹介している（http://www.cgap.org/publication-type/focus-note）。最後に、本書評の詳細版は、社会デザイン学会ファイナンシャル・インクルージョン研究会文献紹介（http://fields.canpan.info/report/detail/18981）を参照願いたい。

■註

(1)「最底辺のポートフォリオ―1日2ドルで暮らすということ」(2011年）共同著者。SafeSave は、貧困女性を対象に柔軟性に富んだ仕組みで、かつクレジットのみならず、貯蓄や保険等へのニーズに注目して、1996年にラザフォード氏が立ち上げた実験的 MF プログラム。

(2) 監訳者の笠原教授は、立教時代に、「アジアにおける知的協働と社会デザイン研究」をテーマに掲げ、グラミン銀行や、BRAC との連携の下、高度な研究と人材育成に向けての全学的な取り組みを行った経緯がある。また、笠原教授は、立木勝氏とのチームで、イアン・スマイリー著「貧困からの自由―世界最大の NGO–BRAC とアベッド総裁の軌跡」を 2010 年 10 月を明石書店から出版。

(3) オリジナルの共同編者のひとりベアトリス・アルメンダリズは、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン上級講師。他のひとりは、マルク・ラビーモンス大学ワロッケ・ビジネススクール准教授。